

志賀直哉「城の崎にて」における〈運命〉と〈偶然〉

—— 英語教科書としてのマコーレー著 *Lord Clive* 引用の意味 ——

入 江 香 都 子

要 旨

志賀直哉の作品「城の崎にて」一九一七（大正六）年は、その無駄のない文体が多くの評者によって賞賛されてきた。また、戦後、高等学校の国語教科書の教材に採択されたこともあり、今日でも広く人口に膾炙しており、研究も多い。

ただ、作品の冒頭近く、列車事故に遭った語り手が九死に一生を得て助かったことと対比する形で出てくるロード・クライヴのエピソードの意味については、これまでほとんど注目されてこなかった。しかし、この引用には、ほんの数行でありながら当時の読者には喚起させる多くの情報が詰まっており、そうした時代のコンテクストを明らかにすることにより、作品「城の崎にて」の新たな読みの可能性が見いだせるのではないだろうか。

本稿では、まず「城の崎にて」発表当時の時代背景に遡り、英語教科書の教材として *Lord Clive* が採用されていた意味を考察する。次に、「城の崎にて」のテキストの構造や草稿からの改稿過程の分析を通して、「私」の心境の流れを読み解いていく。

これらの考察を通して、ロード・クライヴのエピソードが単なる導入的付属物ではなく、無駄のない「城の崎にて」の文体及びテキストの構造の一部として重要な意味を持って組み込まれており、この作品が当時のコンテクストにおいて時代的な批評性を秘めていたことを明らかにする。

キーワード：生と死／ロード・クライヴ／ホイッグ史観／英語教科書の歴史／動と静

序

志賀直哉の小説「城の崎にて」⁽¹⁾は、これまでの研究において、文体面では谷崎潤一郎の『文章読本』の言に代表されるように⁽²⁾、主にその無駄のない文章の美しさが、また内容面では生と死の凝視、志賀自身の死生観といった側面から評価され、数多くの論文が書かれてきた。また、作品が国語教科書に採用されていることから、上記の観点から教材として論究するものも少なく

[1]

ない。ところが一方で、その語り手、「自分」の死生観と密接な関係を持つにも関わらず、作品の冒頭近く、列車事故に遭った語り手の「自分」が九死に一生を得て助かったことと対比する形で出てくるロード・クライヴのエピソードの意味も、語り手の個人的な生死レベルでの範囲内で解釈されてきた傾向があり、この「ロード・クライヴ」の重要性について、焦点化して深く掘り下げた論は見当たらない。

「ロード・クライヴ」からの引用は作品において、語り手の「自分」に、生と死の問題を考えるきっかけを提供している。しかし、これまでの論では、その対比した結果にだけ注目している傾向がある。危機的な状況から生き延びたことへの「自分」の解釈と、ロード・クライヴのそれとは、似ているようでいて実は著しく対立することを見逃してはならない。「城の崎にて」の「自分」は生と死の別を〈偶然〉の産物だと考えるに至るが、ロード・クライヴは必然、すなわち「何か自分が殺さなかつた」という〈運命〉的な考えを抱いたのである。突き詰めれば、「城の崎にて」には二つの死生観が対比されており、その一方がロード・クライヴのもの、もう一方が語り手「自分」のものであることから、「ロード・クライヴ」が作品内で持つ意味は思いのほか大きいのである。

この対比から、西洋と東洋という対比を考えることは容易である。しかし、作者志賀直哉は東洋的境地を表現し、西洋的な発想から離れたのだとの解釈に還元するのは、不十分ではないだろうか。というのも、「ロード・クライヴ」は単に西洋を表しているのではなく、この作品執筆当時の日本においては別の重要な意味を持っていたからである。

今日の目からみれば、「城の崎にて」冒頭の「ロード・クライヴ」の引用は、一見、語り手である「自分」の心情を導き出すための、ほんの付属的な導入に見えるかもしれないが⁽³⁾、しかし、ここでいう「ロード・クライヴ」とは当時志賀にとっては、あるいは当時の読者にとっては英語教科書の教材であったということに注目したい。また同時に、当時のイギリスの有名な歴史学者であるT.B.マコーレーによる著作でもあった。そのことを踏まえていくことにより、この引用には、ほんの数行でありながら今日の読者とは違い、当時の読者に喚起させる情報が詰まっていたことに気づく。そうした時代のコンテキストを復元させることにより、作品の新たな読みの可能性が見いだせるのではないかと考える。これまでの研究において「城の崎にて」は、多く志賀の個人レベルでの死生観に焦点を当てて読まれてきた傾向にあるが、この作品は、個人の死生観という枠内のみにおさまるものではない。また志賀の作品でよく指摘されている汎神論的世界観や東洋的寂寞といったものとも違うテーマを孕んでおり、そこに同時代性を連関させていることにこそ意味があると思うのだ。

本稿では、志賀直哉が「城の崎にて」にロード・クライヴのことを導入したことの意図を証明し、その心境の変化を考察することを目的とする。これまで「ロード・クライヴ」と「自分」という対比には注目しても、「ロード・クライヴ」がどのような文脈で使われていたのかということや、

時代的意味には注目されず、この数行に隠された深い意味が考察されてこなかった。ここに注目することで、違う意味が見えてくると考える。

そのために、まず「城の崎にて」発表当時の時代背景に遡り、英語教科書の教材として「ロード・クライヴ」が採用されていた時代的な意味を考察し、志賀が「ロード・クライヴ」を作品内に引用することによって読者に想起させようとした事柄や背景のコンテクストを浮かびあがらせる。次に、テキストの構造や草稿からの改稿過程の分析に移り、蜂、鼠、蠨螋のエピソードから語り手が生と死の問題をロード・クライヴの感じた〈運命〉的なものとは対比的に、〈偶然〉のものだと考えるに至った心境の流れを、特に蠨螋の場面の執筆過程を中心に読み解いていく。

これらの考察を通して、ロード・クライヴのエピソードが単なる導入的付属物ではなく、無駄のないと評される「城の崎にて」の文体及びテキストの構造の一部として重要な意味を持って組み込まれており、この作品が当時のコンテクストにおいて時代的な批評性を秘めていたことを明らかにする。

一、マコーレー著 *Lord Clive* 引用の意味

まず、作品冒頭近く、山手線で電車にはねられ、その後養生にと城崎温泉を一人訪れた語り手「自分」が、列車事故から九死に一生を得たことに対する感慨を述べた箇所に注目したい。

自分は死ぬ筈だったのを助かった、何かが自分を殺さなかつた、自分には仕なければならぬ仕事があるのだ、——中学で習ったロード・クライヴといふ本に、クライヴがさう思ふ事によつて激励される事が書いてあつた。実は自分もさういふ風に危ふかつた出来事を感じたかつた。そんな気もした。然し妙に自分の心は静まつて了つた。自分の心には、何かしら死に対する親しみが起つてゐた。 「城の崎にて」

先にも述べたように、これまでこの部分におけるロード・クライヴの役割は、語り手の「自分」が「死に対する親しみ」を感じるようになったことを導くための単なる対比的な導入部とのみ考えられてきた。そのため、ロード・クライヴが引用された事自体の意味を主眼に、深く考察した論は見当たらない。しかしここには、従来見落とされがちだった重要な意味が内包されている。そのことを明らかにするために、ロード・クライヴが何者なのかを先に確認しておこう。

ロード・クライヴは、イギリスのインドにおける覇権を確立したプラッシーの戦い大勝の立役者であることから、明治中期から大正期の日本で、イギリスの英雄として紹介されていた。当時イギリスは世界の帝国であり、日本の近代化の到達目標であった。志賀の中学時代にあたる一八九五（明治二十八）～一九〇三（明治三十六）年の日本は、まさにその近代化のまっただ中の時

期にあたり、一八九四（明治二十七）年日清戦争、一九〇四（明治三十七）年日露戦争の二つの戦争に勝利し、列強の仲間入りをするに至る渦中であった。

一市民が戦争で国のために働き、勲功としてLordの称号を受けるクライヴのサクセスストーリーはまさに当時の日本の国家政策に合致していたのである。そうした状況の中で、イギリスの歴史学者マコーレーによって書かれたクライヴの伝記である*Lord Clive*という書は、学習院などの中学校や旧制高等学校等で英語の教科書に採用され、広く知られていた。

例えば、日本の英語教育史を専門とする高梨健吉氏が、明治期の英語教科書について、マコーレーによる著作を二つ並べ、*Lord Clive*は「英語の上級クラスでは『ヘスチングス伝』とともに広く読まれた」と指摘している⁽⁴⁾。また一八九〇（明治二十三）年に、マコーレーの著書『瓦連兵須珍虞斯伝』われんへいすちんぐでんを訳した渡辺松茂は「クライヴの実伝を読む者、またヘスチングスの実伝を知らんとするは実に人情の然らしむる所なり。且つ方今本邦公私立英学校の教科書中二氏の実伝を備へざるもの殆ど之れなし」と書いている⁽⁵⁾。これらのことからわかるように、*Lord Clive*は当時日本で盛んに採用されていた有名な英語教科書だったのである。

実際、志賀が通った当時の学習院について書かれた『学習院一覧』（明治三十四―三十五年）の「中等学科各級教科用書籍一覧表」における、英文課の教科書は「マコーレー クライヴ伝」と記されており、志賀が五年級であった一九〇一（明治三十四）年には、確かに*Lord Clive*を教科書として読んでいたことが確認されるのである⁽⁶⁾。また、学習院以外に、旧制高等学校でもこの本は英語教科書に採用されていた。例えば、芥川龍之介は一九一〇（明治四十三）年に、第一高等学校入学直後の授業の内容を「木曜日から授業有之、一週独語九時間英語七時間と云ふひどいめにあひ居候 教科書はマカウレイのクライヴ カーライルのヒーロー ウオーシツプ及ホーソーンの十二夜物語の抜粋に御座候」⁽⁷⁾と、手紙で友人に伝えている。さらに、『旧制高等学校全書』をみれば、実際、第一高等学校に限らず、第三高等中学校、第六高等学校でも、*Lord Clive*を教科書として採用していたことが記され、他にも明治十九年から大正初期までは、各地の旧制高等学校及びその前身の旧制高等中学校で*Lord Clive*をはじめとするマコーレーの著作は盛んに英語教科書として使用されていたことがわかるのだ⁽⁸⁾。

このように、マコーレーの著作が英語教科書として盛んに用いられていた事実を示すエピソードの一つとして、一九二四（大正十三）年、芥川龍之介が編集し興文社から刊行された英語教科書*THE MODERN SERIES OF ENGLISH LITERATURE*（全八巻）の「序」は興味深い。芥川はその序文冒頭から「学生は新を愛するものである。新を愛する学生にMacaulayやHuxleyを読めと云ふのは残酷と評しても差支へない」⁽⁹⁾と述べており、こうした記述からも、いかに当時の学生たちが定番の英語教科書として、マコーレーの著作を日常的に読んでいたのかうかがえるだろう。

そして、先に示した「城の崎にて」冒頭のロード・クライヴ引用の部分は、*Lord Clive*の中で、

クライヴが二度にわたってピストル自殺を企てたものの、そのどちらも、ピストルの装填に問題がないのに発砲しなかったという以下の場面と呼応する。

Twice, while residing in the Writers' Buildings, he attempted to destroy himself; and twice the pistol which he snapped at his own head failed to go off. This circumstance, it is said, affected him as a similar escape affected Wallenstein. After satisfying himself that the pistol was really well loaded, he burst forth into an exclamation that surely he was reserved for something great.

LORD CLIVE

(書記官の官舎に住んでいた頃、彼は二度自殺しようとしたが、自らの頭に撃ったピストルはどうしたとか、二度とも不発だった。この状況は、かのワレンシュタインが死を決意して死ねなかった時のように、彼のその後に影響を与えたといわれている。ピストルの装填に問題がなかったことを確かめ満足し、彼は突然、自分が必ずや何か偉大なことをなすよう運命付けられているのだと確信し、感嘆の叫び声をあげた)⁽¹⁰⁾

最後の *surely he was reserved for something great* は、直訳すると「自分が必ずや何か偉大なことを成すよう運命付けられているのだと確信した」と訳せるが、志賀が「城の崎にて」でこの場面を「何か自分が殺さなかった、自分には仕なければならぬ仕事があるのだ」と書いていることから推測すると、英語の原本だけでなく当時 *Lord Clive* の最初の翻訳本として出まわっていた末広鉄腸の『印度政略史』で、「天ノ我ヲ殺サル者ハ偶然ニ非ズ必ラズ我ヲシテ一大事業ヲ成サシメント欲スルナリト」という訳文も参照していた可能性が高いと考えられる⁽¹¹⁾。さらにこの箇所は、先に挙げた高梨氏の『英語教科書の歴史と解題』によれば、英語教科書としてよく読まれた *Lord Clive* の中でも、特に「有名なエピソード」として指摘されている⁽¹²⁾。つまり、志賀が「城の崎にて」で引用したロード・クライヴのエピソードは、当時広く中学校や旧制高等学校の上級向け英語教科書として使われていた *Lord Clive* の中でも、最も有名な箇所だったのである⁽¹³⁾。

クライヴはこのエピソードの後、自ら志望して書記官から軍籍に移り、軍人としての頭角を現していく、そして後にイギリスの印度覇権の礎となったブラッシーの戦いで勝利するのである。これに当時の日本の社会背景を加味すると、「ロード・クライヴ」がクライヴの伝記という以上に、この教科書が開国から明治期の日本に影響を与えたイギリスの歴史家 T.B. マコーレーによる *Lord Clive* であることが重要な意味を持つてくることを見逃してはならない。マコーレーはそのホイッグ史観とともに広く日本に知られ、近代化を急ぐ人々に多大な影響を与えていたのだ。

ホイッグ史観 (Whiggish historiography) の基本となる考え方は、相互に排他的な対局概念によって歴史を裁断し、一方が他方を克服し、その成功や繁栄を歴史的必然、絶対的な運命に導か

れるものと捉えて勝利者を正当とする歴史観であり、マコーレーはこのホイッグ史観を代表する歴史家である。その著作*Lord Clive*は、一八四〇年にホイッグ党の立場を明らかにしたイギリスの評論雑誌*Edinburgh Review*誌に発表、明治十年代には日本における英語教科書として流行し、翻刻版や注釈、訳本まで出ている。また、一八八五（明治十八）年に和訳本も出版された。実際、先に引用したロード・クライヴの自殺未遂の場面も生と死を対局概念として捉え、死なずに生き残った自分の生を、必然や運命として捉えるホイッグ史観に基づいていることがわかる。このマコーレーのホイッグ史観には、日本では民友社の徳富蘇峰や明治期から昭和にかけて活躍した歴史家・竹越与三郎をはじめ多くの人々が影響を受けており、その歴史観が日本の近代化に多大な影響を与えたことが、イギリス近代史を専門とする今井宏氏の『明治日本とイギリス革命』でも考察されている⁽¹⁴⁾。

日本文学者の石原千秋氏が『国語教科書の中の「日本」』⁽¹⁵⁾で、教科書が国策を反映しやすいものであることを述べているように、当時、学習院や旧制高等学校で盛んに英語教科書に採択されていたマコーレーの*Lord Clive*は、こうした時代のコンテクストに照らし出してみると、まさに当時の日本の国策の一環を担っていたことがわかるのだ。事実、一八九〇（明治二十三年）年に刊行された『学習院教育要領』には、語学教科書の選択の基準として次のように記されている。

語学教科書にハ専ら古今名士の嘉言善行を録し或ハ歴史中著名なる事蹟等を載せるを以て（欧米諸国の如き多くは国民的読本なる者ありて一に学生の愛国心を涵養せしむるを以て目的とす⁽¹⁶⁾

つまり、*Lord Clive*は愛国心を涵養するための、近代化の英雄、植民地主義の英雄の伝記という意味がこめられており、そのことは志賀も当時の小説読者もわかるという共通認識があったのである。

以上の時代背景を考慮して「城の崎にて」を読まなければ、なぜ作中にロード・クライヴが出てきたのか、十分には理解することはできない⁽¹⁷⁾。そこに作品「城の崎にて」完成に至った時の、時代の国家主義的な歴史観、死生観に対する志賀の批評精神を読み取ることができるのではないだろうか。そのことが、生と死の問題を扱った「城の崎にて」にも、個人的な死生観の枠を越えて反響しているのである。

二、「生と死」、「動と静」の二項対立をこえて

ただし、志賀は意識的に、思想的に、ロード・クライヴに反発したというのではない。彼は特に反植民地主義者だったわけではなく、むしろ、最初はできればロード・クライヴのように「感

じたかった」と思いつつ、自身の感性に忠実であった結果、それができなかったのである。言い換えれば、彼は自身の身体感覚にもとづいて、ロード・クライヴとは正反対の発想に最終的に至ったといえる。その気持ちの流れが、テキストの表現にはよく表れている。

ここから、「城の崎にて」のテキストの具体的な分析に入っていこう。既に多くの論者によって指摘されているように、テキストには、語り手である「自分」の気持ちを表現する言葉として、繰り返し「淋しい」「静か」という表現が出てくる。城の崎に到着してすぐの、「自分」の境地が語られる部分でも、「考へる事は矢張り沈んだ事が多かつた。淋しい考だつた」と、「沈んだ事」「淋しい考」、すなわち自分の死について考えている。それは「静ないい気持」であり、「淋しいがそれ程に自分を恐怖させない考」という。この後、作品中には、蜂、鼠、蠨螋の順で生き物の生死を巡るエピソードが出てくるが、それぞれの場面との遭遇を通して「自分」の考える生と死への思いが徐々に深まり、変化していくことになる。

まず最初に出てくる蜂の場面では、「生きている蜂」と「死んでいる蜂」の違いが、「忙しさに働いてゐた」「少し歩きまはる奴もある」「羽根を両方へしつかりと張つてぶーんと飛び立」ちというように「如何にも生きてゐる物といふ感じ」を表す〈動〉と、「一つ所に全く動かずに俯向きに転つてゐる」「それは三日程その儘になつてゐた」「凝然としてゐる事だらう」という「如何にも死んだものといふ感じ」を表す〈静〉の対比によって描写されている。そして、その上で死んだ蜂と、墓に横たわる死後の「自分」の姿をその「淋し」さや「静」かさと重ね合わせているのである。

蜂の次には、鼠の災難の場面に遭遇する。ここでは頭から首に魚串を刺され川に投げ込まれた鼠に、子供や車夫が石を投げており、一方の鼠がなんとか川から這い上がって助かろうともがき苦しむ姿が描かれている。このなんとか助かろうとする鼠と、列車事故に遭った後に、なんとか助かろうと「できるだけのことをしようとした」語り手自身の姿とを重ね合わせ、「それは鼠の場合と、さう変らないものだつたに相違ない」と述懐しているのである。ここでも蜂の場面と同様に、「自分が希つてゐる静かさの前に、ああいふ苦しみのある事は恐ろしい事だ。死後の静寂に親しみを持つにしろ、死に到達するまでのああいふ動騷は恐ろしいと思つた」と、「死後」＝「静(かで)寂(しい)」／「死に到達するまで」＝「動(き)騷(ぐ)」というように、生と死をやはり〈動〉と〈静〉の二項対立として描こうとしていることに気づく。これまでの研究においては、「静か」さや「寂し」さに重点が置かれてきた傾向があるが、〈静〉は単独ではなく、あくまでも〈静〉と〈動〉との関係において書かれていることこそが重要なのである。さらにここで興味深いのは、生と死、〈動〉と〈静〉の境界を決定付けるのに、魚串をねずみに刺したり、鼠が川から這い上がるのをじゃましようと子どもや車夫が石を投げるといったような他者の悪意つまり、他者の意思が関わっていて、語り手がそれを「死ぬと極まつた運命」と、運命と感じていることである。

ところが、最後の蠼螋の場面にいたって、蜂と鼠の場面で感じられていた生と死を分かち二項対立の図式は大きく変化する。

未だ濡れてみて、それはいい色をしてみた。頭を下に傾斜から流れへ臨んで、凝然としてみた。(……)自分は蠼螋を驚かして水へ入れようと思つた。不器用からだを振りながら歩く形が想はれた。自分は躓んだまま、傍の小鞠程の石を取上げ、それを投げてやつた。自分は別に蠼螋を狙はなかつた。狙つても逆も当らない程、狙つて投げる事の下手な自分はそれが当る事などは全く考へなかつた。石はこつといつてから流れに落ちた。石の音と同時に蠼螋は四寸程横へ跳んだやうに見えた。蠼螋は尻尾を反らし、高く上げた。自分はどうしたのかしら、と思つて見てみた。最初石が当たつたとは思はなかつた。蠼螋の反らした尾が自然に静かに下りて来た。すると肘を張つたやうにして傾斜に堪へて、前へついてみた両の前足の指が内へまくれ込むと、蠼螋は力なく前へのめつて了つた。尾は全く石についた。もう動かない。蠼螋は死んで了つた。 [城の崎にて]

この蠼螋と遭遇した場面の表現で特徴的なのは、まず第一にそれまでの蜂や鼠の場面では、生と死が〈動〉と〈静〉の二項対立で書かれていたのに対し、それだけでは語りきれなくなっていることである。蜂や鼠の時とは違い、二項対立の境界は曖昧になっているのである。例えば、蠼螋は「濡れてみて、それはいい色をして」如何にも生きているものようであるが「凝然としてみる。つまり生きているが〈静〉かで〈動かない〉ものとして描かれている。また、蠼螋と遭遇する直前に描かれている桑の葉の描写も、まるでこれから起こることに対する導入であるかのように、同様の意味を持っていることも見逃してはならない。「総て静寂の中」に風もないのに「忙しく動」き、風が吹くと「動く葉は動かなくなつた」と、〈動〉と〈静〉の二項対立の図式には納まりきれない現象が示唆されている⁽¹⁸⁾。

そして第二に、その蠼螋の生と死の境界を分つことになった「自分」の投石が、子どもや車夫が鼠に投石していた時と対照的に、蠼螋の死を意図した行為ではなかつたこと、言い換えれば、蠼螋の死は鼠の場合と異なり、他者の意図とは無関係に起こった出来事として描かれているのだ。このことは重要である。語り手が「蠼螋は好きでも嫌ひでもない」と好悪の別を離れ、「自分は別に蠼螋を狙はなかつた」というように、他者である語り手「自分」の意図とは全く無関係に、蠼螋は〈偶然〉石に当たって死んでしまうのである。そして、それは誤って「其気が全くないのに殺して了つた」〈偶然〉の死であり、蠼螋にとっては「不意な死」であると、蠼螋の死が石を投げた自分の意図とは無関係なものだということが示されるのだ。その〈偶然〉の死を「蠼螋の身になつて其心を感じた」と、自分と重ね合わせているのである。これはちょうど列車事故の瞬間の自分と、蠼螋に石が当たった瞬間を重ね合わせているということと呼応する。その上で、「自

分は偶然に死ななかつた。蠓蠓は偶然に死んだ」と続け、生死を決定するのは必ずしも他者の意思にはよらない偶然のものであり、二項対立の両極にあるものではないという心境に至っている。つまり、蠓蠓も語り手の「自分」も、偶然生き残りもし、死にもする生き物だという境地で、「生き物の淋しさを一緒に感じ」ているのである⁽¹⁹⁾。

ここに至って、「自分」が事故から死なずに生き残ったことが「ロード・クライヴ」に描かれているような、生と死を対極に置き運命に導かれて生き残った〈運命〉的な必然ではないことが示唆され、「偶然に死ななかつた」自身のことに帰結することになる。そうして、「生きて居る事と死んで了つてゐる事と、それは両極ではなかつた。それ程に差はないやうな気がした」という心境に至っていくのである。

以上、城の崎滞在中に遭遇した、蜂、鼠、蠓蠓のエピソードを通して、まず死後に墓の下に横たわる「自分」、事故の後に助かろうとあれこれ努力した「自分」、そして事故の瞬間の「自分」へと順々に自身の心境や身体感覚を遡っていき、生き残った「自分」の生に対して、「ロード・クライヴ」が自らの生を死と対極に置いて感じた〈運命〉とは違い、生と死の境界が、他の生き物と同様に「偶然」のものだという境地に至るのである。

三、運命と偶然

もっとも、こうした身体感覚に忠実になるには努力があった。志賀は事故で九死に一生を得た後、「城の崎にて」の草稿となる「いのち」⁽²⁰⁾を書いたが、そこではまだ彼の生と死についての考えは彼の感じていたことを忠実に表現できていなかった。その証拠に、最後に生の偶然性を感じるに至る蠓蠓の場面を、草稿では書きかけながら途中で挫折している。それが数年を経て考えが成熟してきて、ようやく三年後に「城の崎にて」となったのである。そのプロセスは、彼がロード・クライヴを真に脱するプロセスでもあったといえるだろう。最後にこの草稿からの改稿過程をみることで、これまでの考察を補強したい。

右に述べたように、蠓蠓のエピソードについては、草稿では蠓蠓の場面を書き始めたところで中断しており、誤って蠓蠓を殺した場面は書かれていない。また同時に「ロード・クライヴ」のエピソードも、実は「城の崎にて」完成に至って初めて登場するのである。草稿の段階ではこのクライヴのエピソードに当たる生と死を〈運命〉によって捉える部分は、別の二つのエピソードを通して丁寧に語られている。

一つ目は、「自分」と同じように鉄道事故に遭い九死に一生を得た男児の幸運を文章にした、まさにその夜に自身が鉄道事故に遭ったこと、二つ目は、ある老人が八十何歳かになった祝いをした二三日後に電車で轢かれそうになり、惰性で停車した電車の前の網に足首が当たった事で転倒して死んでしまったというものである。子どもの命拾いでは、「自分が子どもの助かったこと

を書いて置いたが故に自分も助かったやうに思はれてならなかつた」と述べ、老人の事故死のエピソードには「自分の出会った危険に引き比べて、不思議な心持がした」と、「自分」が死ななかつたことに対して、生と死を対極に置いて生き残った自分に運命的な力を感じていることが書かれているのである。

注目したいのは、その後小説「城の崎にて」を書き上げるに至って、これら草稿の運命的なエピソードは全て削除され、前にも示したロード・クライヴの引用に簡潔に置き換えられていることである。しかも、草稿では「自分」が助かったことがいかに「幸運」なことであったかを事故の経緯とともに詳細に述べ、「自分の怪我は最小限で済んだ。自分は後になつて其時の恐しさをシミべゝ感じた。而して自分の幸運を感謝した」と運命的なものを感じているのに対し、「城の崎にて」では事故の委細や感慨は削除した上で、冒頭のロード・クライヴの引用の場面において、「実は自分もさういふ風に危ふかつた出来事を感じたかつた。そんな気もした。然し（…）」と、意味を反転させているのである。さらにこうした心境の変化は、作品の最後の蠅蠅の場面で、生の偶然性に思い至る部分でも繰り返されている。

そして死ななかつた自分は今こうして歩いてゐる。さう思つた。自分はそれに対し、感謝しなければ済まぬやうな気もした。然し実際喜びの感じは沸き上つては来なかつた。生きて居る事と死んで了つてゐる事と、それは両極ではなかつた。それ程に差はないやうな気がした。

「城の崎にて」

生と死を対極に置き、何かの意図、意思による運命によって死ななかつたとするロード・クライヴと同じやうに、生き残った自分の生を〈運命〉によって描こうとしたことから始まりながら、最終的には〈運命〉から離れて、生と死というのは必ずしも何かの意図によって確然と分かたれるものではない〈偶然〉である、という心境に至っているのである。

以上、考察してきたやうに、当初志賀は、草稿の段階では生と死を運命的なものとして書こうとしながら書ききれず、小説「城の崎にて」に至って、その運命的な生を「ロード・クライヴ」の一文に置き換え、最終的にはそこから対照的な境地に至った「自分」の心境を書き上げている。しかし、草稿で書かれた二つの運命的なエピソードを「ロード・クライヴ」に集約させたことにより、それは単なる生の必然と偶然の問題にとどまらない別の意味を担わされることになったのだ。本稿の最初に述べた、当時の英語教科書としての「ロード・クライヴ」が持っていた意味を踏まえた時、そこに描かれる、運命的な生と対照的に生の偶然性を最終的に見いだしていく「城の崎にて」という小説の構造は、新たな意味を付与されることとなった。すなわち、歴史を排他的、対立的概念によって裁断し、勝利者は運命付けられているとするホイッグ史観に代表される当時の国家的な風潮、時代的な死生観に対しての、批評的な意味も帯びることになったのである。

また教科書によって「ロード・クライヴ」を読んでいた当時の読者も、それを感じることはできなかったはずである。ここに志賀直哉の批評精神を読み取ることができるだろう。作者は、ロード・クライヴが感じた〈運命〉的なものを、語り手が〈偶然〉と感じるに至った過程を描いているが、この違いはクライヴが体現していた「国家のために生き死にする」ということへの志賀の違和感を表しているのである。志賀は積極的に政治関与をせず、この作品に政治的意見を託しているわけではないが、そうであったとしても「ロード・クライヴ」を引用することにより、「城の崎にて」には志賀の同時代のイデオロギーに対する距離感が表明されているといえるのである⁽²¹⁾。「城の崎にて」は、個人の心境小説という形をとりながら、当時のコンテキストにおいて時代的な批評性をも秘めた極めて重要な作品なのである。

〔注〕

* 志賀直哉の文章の引用は原則として『志賀直哉全集』（岩波書店、一九九八—二〇〇一年）に拠った（以下『全集』と略）。ただし、引用部の傍線は全て引用者が付したものである。

- (1) 『白樺』第八巻第五号、一九一七（大正六）年五月一日発行。一九一八（大正七年）、単行本『夜の光』（新潮社）に収録。『全集』第三巻所収。なお、以下、本稿では基本的に時代表記は西暦を用いるが、「城の崎にて」との同時代性を示す場合には、特に元号表記も併記する。
- (2) 谷崎潤一郎は『文章読本』（中央公論社、一九三四年）において、「城の崎にて」の文章について、「書いてあることが（…）はっきりと読者に伝わるのは、出来るだけ無駄を切り捨て、 unnecessaryな言葉を省いてあるから」。「簡にして要を得てあるのですから、このくらい実用的な文章はありません」と評価している。
- (3) 例えば、重友毅氏は「『城の崎にて』（『文学研究』第四四号、一九七六年十二月初出、『志賀直哉研究』笠間書院、一九七九年所収）において、「これはいささか神秘的な見解のようだが、しかし別に珍しいことでもない。クライヴに限らず、東西古今、似たような例はいくらかもある」と、この引用がクライヴであることに特に意味はないと考えている。
- (4) 高梨健吉『英語教科書の歴史と解題』英語教科書名著選集・別巻（大空社、一九九四年）
- (5) 渡辺松茂訳述『瓦連兵須珍虞斯伝』（積善館、一八九〇〔明治二十三〕年）
- (6) 『学習院一覽 時明治三十四年九月 至明治三十五年八月』（学習院、一九〇二〔明治三五〕年）。
- (7) 『芥川龍之介全集』（岩波書店、一九九七年）第十七巻所収。一九一〇〔明治四十三〕年九月十六日、山本喜誉司宛書簡。
- (8) 『旧制高等学校全書 第三巻 教育編』（旧制高等学校資料保存会刊行部、一九八一年）
- (9) 『芥川龍之介全集』（岩波書店、一九九六年）第十二巻所収。
- (10) LORD MACAULAY, *LORD CLIVE*（積善館、一八八七〔明治二〇〕年）。括弧内に(11)末広重恭の訳を参考に拙訳を附した。
- (11) 末広重恭（鉄腸）訳述『印度政略史 原名クライブ公伝』一八八五〔明治十八〕年には次のように書かれている。
「独り筆生ノ室ニ在リテ小銃ヲ装ヒ己ノ頭天ニ向ツテ之ヲ放ツコト二回ナリシニ如何ナル故ニヤ発弾

セズ怪ンデ銃中ヲ検スルニ弾薬ハ充分ニ装填シタリ是ニ於テ其ノワルレン、スタイン氏ガ死ヲ決シテ死スル能ハザリシ時ト同ジク高声自ラ呼ンデ曰ク天ノ我ヲ殺サマル者ハ偶然ニ非ズ必ラス我ヲシテ一大事業ヲ成サシメント欲スルナリト」(略字はカタ仮名に改めた。)

志賀は「愛読書回顧」(『向日葵』一九四七〔昭和二十二〕年一月)において、十一二歳の頃に末広鉄腸作の政治小説「雪中梅」を愛読しており、「面白く思った」と記述している。「愛読書回顧」は『全集』第七巻所収。

- (12) 注(4) 参照。
- (13) 長嶋和彦氏は「クライブ卿興信録—『城の崎にて』の「ロード・クライブ」について」(『国語教室』第101号、二〇一五年、五月)において、国立国会図書館の蔵書をもとに『ロードクライブ』が明治期に広く教科書として採用されており、同書が「将来の日本を担ってゆくことが期待された知識人の卵というべき旧制中学・高校生に広く読まれてい」たことを指摘している。
- (14) 今井宏『明治日本とイギリス革命』(研究社出版、一九七四年)
- (15) 石原千秋『国語教科書の中の「日本」』(筑摩書房、二〇〇九年)
- (16) 『学習院教育要領』(学習院、一八九〇〔明治二十三〕年)
- (17) 小田島本有氏は、「〈生〉と〈死〉の狭間 —志賀直哉「城の崎にて」を手がかりにして—」(『釧路工業高等専門学校紀要』36、二〇〇二年十二月)において、「城の崎にて」のロード・クライブ引用箇所について、テキスト本文のみの分析から、「何か」とは、神のような超越的存在が措定されていると考えて良いだろう。クライブは「自分には仕なければならぬ仕事があるのだ」と考える。ここには自らを「有用な人物=選ばれし者」と看做し、それ故に神のご加護が働いたと考えようとする姿勢がある」と書いている。
- (18) 宮越勉氏は「『城の崎にて』の重層構造」(『解釈と鑑賞』二〇〇三、八月)において、風がないのに動いている桑の葉の不思議な現象に注目し、「〈動〉と〈静〉が分かちがたく同居していることを示している」とし、それが「蝶蛹の不意の死のシーンのいわば前奏の役割を担っている」と示唆的な解釈をしている。
- (19) 斎藤努氏は「志賀直哉「城の崎にて」—なぜ「殺されたる范の妻は書かれなかったのか」(『国文学論叢』43一九九八年二月)において、「〈動〉と〈静〉の二項対立に注目した数少ない論者の一人であるが、小説の進行とともに、作品後半での二項対立の図式からの変化を「この構図が放棄された」と消極的な意味合いに解釈している。しかし、実際には本稿で考察したように、二項対立を越えて思想が深められているのである。
- (20) 草稿「いのち」は、電車事故と城崎温泉滞在の翌年の一九一四(大正三)年、「城の崎にて」執筆の三年前に書かれた。引用は『全集』補巻三巻
- (21) 「城の崎にて」についての直接の言及ではないが、高橋秀夫氏は『志賀直哉 近代と神話』(文芸春秋、一九八一年)において、志賀の創作態度について、「上昇気流に乗った明治の社会が押し隠したり、回避したりしなければならなかったネガティブな領域を、志賀直哉は体で知っていたように思うのだ。しかし彼は、それを感覚的、肉体的問題に置きかえることによってしか表現しなかった」と述べている。